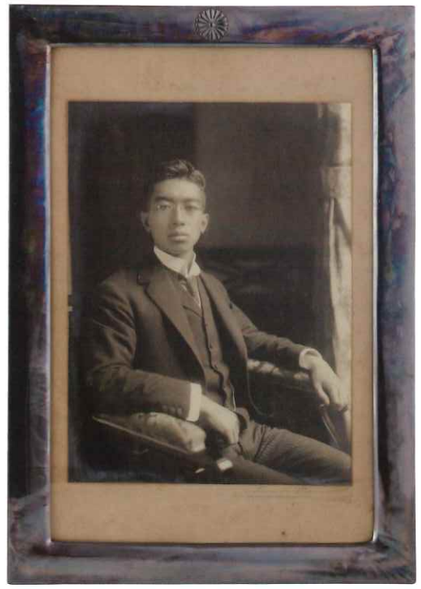
写真 皇太子裕仁親王



Henri Manuel（仏国）撮影　ゼラチンシルバープリント
大正10年（1921）5～7月

大正10年（1921）3月から9月の半年間、日本の皇太子が初めてイギリス、フランス、ベルギー等の欧州各国を外遊した。この外遊は、皇太子が海外の実情を見聞し、海外の君主・元首・要人と接する実地体験の場であり、外遊中の動静は各種メディアを通じて報じられ、日本国内に皇太子人気を引き起こした。

この写真は、フランス滞在中（5月から7月）に撮影された20歳の裕仁親王（1901－89）である。窓から差す柔らかな外光に包まれた背広姿（平服）で、自然な表情やポーズの効果もあり、画面全体がくつろいだ雰囲気に溢れ、知的で凛々しい近代的な青年としての皇太子像が表現されている。

撮影者Henri Manuel（1874－1947）は、20世紀初頭のフランス政府の公式写真を担い、多くの政府要人や国賓、著名人を撮影した肖像写真家である。外遊に供奉した宮内書記官二荒芳徳（ふたあらよしのり）著『皇太子殿下御外遊記』（大阪毎日新聞社・東京日日新聞社、大正13年）には、同時に撮影された別カットの写真が口絵にカラー掲載されていることからも、Manuelの写真が外遊の成功を象徴する存在であったことがわかる。

この肖像写真は、天皇家を示す十六葉八重表菊紋の額に納められ、皇太子より外遊に供奉した東宮武官及川古志郎に贈られた。外遊を供にした供奉員に対する記念とねぎらいの意味を込めて帰国後に下賜されたとみられる。

（学芸員　白政晶子）

御好裂

明治～昭和時代

御好裂（おこのみぎれ）は、天皇や皇后のお好みの意匠を織り出したことからこの名称で呼ばれてきた絹織物である。近代日本における絹織物技術の維持と向上を奨励するため、近代の皇室においては、俵屋喜多川家など西陣の名門の織屋に多様な意匠の錦を織らせてきた。御好裂は、新年の御歌会始のお題や干支、季節を表す動植物や器物、吉祥文様、留守絵などが段替わりで織り出された錦で、お年玉のほか、折に触れて天皇皇后から皇族はじめ関係者に下賜されてきた。宮中においても卓被などに用いられたほか、余り裂で紙入れなどの小物を作り下賜することもあった。生地で賜った宮家などでは、アルバムの表紙などとしても用いられている。

この二種の御好裂は、北白川宮家に伝えられた。一つ目の錦は、萌黄の地に葦の合間を流れゆく観世水を思わせる流水を表し、その水辺には花を咲かせた瀟洒なつつじの株を配する意匠から、季節からみて流れに遊ぶ魚は鮎であろうか。さわやかな初夏を彷彿とさせるデザインである。もう一つの錦は、有職故実の世界でも散見される紫綾（しがりょう）とよばれる紫と白の段替りを斜めに配した地に、舞い降りる丹頂鶴。そして春を寿ぐがごとく咲き誇る可憐な紅梅の折枝を織り出している。

両者とも宮中から下賜された時期及び拝受した人物を明らかにする資料に恵まれないが、御好裂がお年玉として宮中から下賜されてきた歴史とともに、北白川宮永久王妃祥子（さちこ）のお印が紅梅であったことを踏まえると、同妃の時代に下賜された可能性を考えることもできよう。

（EF共同研究員　田中　潤）

唐三彩と俑

図1　唐三彩 馬

図2　唐三彩 鎮墓獣

霞会館記念学習院ミュージアムには、中国古代の明器（墓の副葬品）や俑、唐三彩など貴重な資料が収蔵されている。これは、19世紀末にスイスの教育者、ペスタロッチの提唱した直観（実物）教授法が、学習院にも取り入れられていたことを証明するものであろう。

これら中国古代の遺物は、記録によると大正時代前期を中心に、主に中国大陸で活動していたと思われる古美術商・江藤涛雄から購入されたものである。

「唐三彩 馬」【図1】：高さ32.8cmとやや小ぶりの馬であるが、足や胸、お尻の筋肉が隆々としており、唐時代でも初期の頃の作と判断される。馬の彩色は緑色、褐色、白色の三色で彩られる。

「唐三彩 鎮墓獣」【図2】：高さ29.2cmとやや小ぶりの鎮墓獣（墓を守り悪霊を祓う役目を有する）で、肩に羽が付く。腹の部分は緑色、褐色、白色の斑で彩られている。角の部分は後補であろうか。

図3　唐武人俑

図4　唐女性俑

「唐武人俑」二体【図3】：二体とも同じ墓から出土した可能性が高い。大きな武人俑は将軍、小さな方は兵士であろうか。白い胎土に黄釉を施し、その上に顔料を塗り、甲冑や衣装等の細かな部分を表現している。この二体とも唐代に流行した「明光鎧」を着用している。おそらく唐時代初期の作と判断される。

「唐女性俑」【図4】：この女性が羽織った緑色の美しいショールが印象的である。おそらく唐時代前期の作か。

（館長　荒川正明）

古代土器複製標本

原型制作：濱田庄司
型抜き・複製制作：島岡達三
昭和24－25年（1949－50）頃

学校教育用教材として制作された、縄文・弥生土器の複製標本である。終戦後の新たな学校教育では、資料や模型を用いた授業が推進され、考古用教材の一つとして作られたのがこれらの土器で、「ドルメン教材研究所」により販売された。学習院中等科が購入し授業などで用いたという。

ドルメン教材研究所には戦前から民藝運動に携わっていた村岡景夫が関係しており、土器の制作は村岡の紹介で濱田庄司が担うこととなった。濱田は考古学者らから制作手法などの教示を得て、益子に土器用の窯を新たに築いて制作に挑んだ。益子産の土で濱田が原型を作り、弟子の島岡達三が石膏で型取りし量産体制を整え、組紐職人だった島岡の父が縄文土器の縄目模様を施すための細工棒を特製している。土器の底裏には芹澤銈介デザインの「D」マークを押印して、複製品だということを示し、販売時には明治大学考古学研究室に在籍した芹澤の息子・長介による説明書が添えられた。まさに民藝関係者らの尽力で完成したといえるだろう。

ドルメンでは、各時代の土器などを8回に分けて販売する予定だったが、価格が余りにも高額で、これらの標本のみわずか2回で制作は終了してしまった。学校教育への情熱を物語るこれらの土器標本は、現存数も少なく貴重な品々である。

（EF共同研究員　森谷美保）